# ラフカディオ・ハーンの最高傑作は？

Alan Rosen

ハーンの作品で一番よく書けているのはどの作品でしょうか。多くの読者は、『怪談』におさめられた「耳なし芳一」や「雪女」などのよく知られた話を挙げるでしょう。何故なら、それらの話は彼の作品のなかでも最も有名で親しまれているからです。しかし、日本の文化や社会を知るためにハーンを読む人たちは、つまり民俗学者や日本学者としてハーンを読む人たちは、彼の最後の作品である『日本－一つの解明』を最高作に選ぶでしょう。この作品は、内容といい文体と言い、成熟して均整がとれています。

ところが松江の読者は、その表現が新鮮でいきいきとしているために『知られぬ日本の面影』を好みがちではないでしょうか。それは、だれにも真似できないハーンらしい装飾的で豊かな文体で書かれています。そこには、日本の事物や日本の暮らしの細やかさに対する理解と賞賛の念が表されています。

一方、熊本の読者は、より簡素な文体で、外的な事柄よりも内的な事柄に焦点が合わされた作品、目で見た事よりも心で感じた事を書いた作品を好むようです。『心』や『東方より』など主に熊本で書かれた作品で見られるように、地元の風景や行事に触発されたスケッチが特に好まれています。例えば、「夏の日の夢」では語り手は宇土から熊本港へそして長崎へと旅をして戻ってきますし、「停車場で」では、上熊本駅（元の池田駅）が背景になっています。

しかし、内容と文体においてハーンが最も優れているのは、彼に出版するつもりが全くなかった作品、つまりハーンの個人的な書簡においてではないかと私は思います。海外では、彼の書簡に最高の賞賛がしばしば与えられています。彼の文学作品が、その構造や文体の欠点のせいで文学者から往々にして批判されるのに対し、書簡は誰からも褒め称えられています。実際、その興味深さと読みやすさのために、ハーンの手紙を英語で書かれた世界最高の書簡だとする批評家たちもいるほどです。

賞賛の言葉は、ハーンの死から2年経った1906年にホートン・ミフリン社から初めて出版されたハーンの書簡集とともに始まりました。2巻からなる待望の書簡集の編集には、ハーンがニュー・オリンズ時代に記者をやっていた頃の同僚であったエリザベス・ビスランド・ウエットモアがあたりました。手紙の中から、ハーンと彼が言及した人物のどちらにとっても不都合が生じそうな部分はすべて削除し、ハーンのプライバシーと尊厳と定評を守るという誓約のもとに、ウエットモアはハーン夫人から編集者として選ばれたのです。彼女はまた、売り上げはすべてハーン夫人の手元に渡る事を約束しました。編集者として、ウエットモアはお金と仕事に関するいくつかの記述を興味を引かない事柄として削りましたが、ハーンが日本や学校の事務官への不平を強い口調で述べた部分も削除しました。そのために、ハーンの研究者は、彼が実際に書いた物を読むためには、その原本を探さなければなりません。ですから、ウエットモアが削除した部分や掲載を全く外された数通の手紙を含めたハーンの完全な書簡集が、編纂・出版されることが急務です。そうなって初めて、ハーンの最高傑作の全容が全ての人々に享受できることでしょう。

（アラン　ローゼン　教育学部外国人教師）